発達支援研究部門

1.領域構成教職員・在職期間

発達支援研究部門長・教授	友田　明美	平成２３年６月－
発達支援研究部門・教授（兼任）	大嶋　勇成	平成２３年４月－
発達支援研究部門・客員教授	平谷　美智夫	平成２６年４月－
発達支援研究部門・客員教授	清水　聡	平成２４年１２月－
発達支援研究部門・准教授	藤澤　隆史	平成２５年４月（令和２年４月より現職）－
発達支援研究部門・特命助教	Natasha Yuriko dos Santos	令和３年５月－
発達支援研究部門・特命助教	倉田　佐和	令和６年４月－
発達支援研究部門・特命助教（兼任）	小坂　拓也	令和６年４月－

2.研究概要

研究概要

【発達支援研究部門】
　発達支援研究部門は、次世代を担う子どものこころの健康を積極的に支援するために設立された部門であり、国内外の研究者と連携して以下のような研究を行っています。
１．マルトリートメント予防のための分子生物・脳画像学研究と社会実装
子ども虐待・ネグレクトがヒトの脳に与える影響や、エピジェネティックスに関連する研究を行っています。また、子どもの感受性期や発達状況を予測するためのモデリングを特定し、その成果を地域に活用する取り組みも進めています（米国エモリー大学、スタンフォード大学、UCLA、中国ハルビン医科大学との国際共同研究を展開中）。さらに、「マルトリ予防®」と「とも育て®」に関する研究や社会貢献活動も推進しています。
2.　脳活動の可視化による神経発達症（発達障がい）の新たな科学的評価法の研究開発と応用
注意欠如・多動症（ADHD）児や自閉スペクトラム症（ASD）児、愛着（アタッチメント）障害児の脳構造・機能の特徴を脳画像で可視化する評価法の研究開発を行っています。
３．子どもの未来を拓くマルトリートメント予防システムのための養育者支援研究と社会実装
子ども虐待対策として、養育者のメンタルヘルス支援が重要です。科学的根拠に基づく養育者支援システムの構築やその成果の普及、専門家の育成を目指して、精神疾患予防を考慮したマルトリートメント予防モデルの研究を進めています。特に、養育者によるマルトリートメント予防のためのセルフモニタリングシステムの構築と、保育士の実行機能に関する脳画像研究に取り組んでいます。

４．子育て困難な養育者の支援・介入法確立のための脳画像エピゲノム解析研究
　子どもへの虐待リスクを引き起こす子育て困難な養育者の脳やエピジェネティクスのメカニズムを解明し、虐待リスクを評価するためのバイオマーカーの開発を進めています。
5. 神経発達症（発達障がい）児の養育者を対象とした子育て支援プログラムに関する研究
神経発達症児の子育て支援プログラムが母親のストレスや親子関係の改善に与える影響、及びそのプログラムが親子の脳機能や脳構造に及ぼす効果を検証する研究を進めています。

キーワード

【発達支援研究部門】
子どものこころ，発達障害，愛着障害，　マルトリートメント，養育者支援，エピジェネティクス

業績年の進捗状況

【発達支援研究部門】
1.ネグレクト経験のある児童の脳発達に関する神経生物学的研究
ネグレクト経験児の脳構造と機能変化をケースコントロール研究で調査した。ネグレクト群では定型発達群と比べ左右前帯状皮質の体積増加と左角回の灰白質減少が認められ、前帯状皮質の増大は多動・不注意と、左角回―左小脳間の結合増加は友人関係のトラブルと関連することが示された。これらは、ネグレクト経験が脳に与える影響解明と早期介入の根拠となる。研究成果はNeuroImage誌に掲載された（Kawata et al., Apr 2, 2024）。また、科学研究費国際共同研究強化プログラムの一環として、河田がカナダのウエスタンオンタリオ大学に派遣され、国際共同研究を一層推進した。

2.被虐待児の網膜厚の異常と視覚野灰白質容積の関係についての研究
　本学眼科との共同研究で、被虐待児と健常児に眼科検査とMRIを実施した結果、被虐待児は網膜が薄く、右視覚野の灰白質容積が増加していることが明らかになった。これは、虐待経験が網膜構造や脳発達に関連している可能性を示唆し、小児期虐待を評価する新たな臨床的手法を提案するものである。研究成果はSci. Rep.誌に掲載された（Yao et al., May 20, 2024）。

3.ADHD児の母親向けペアレントトレーニングの効果と費用対効果の実践的な無作為比較試験
　ADHDを持つ子どもの母親を対象にしたペアレントトレーニング（Well Parent Japan）プログラムの効果と費用対効果を検証するためのランダム化比較試験を沖縄科学技術大学院大学（OIST）主導のもと、多機関と協働で行った。同プログラムは、母親のウェルビーイング、子育てに対する自己効力感、育児スキル、家族の緊張感に関して、ペアトレ受講直後および3ヵ月後の追跡調査において、通常医療サービスより優れており、ADHD児の家族に質の高い支援を提供でき、支出に見合う価値をもたらす支援プログラムであることが示唆された。研究成果はJ. Child Psychol. Psychiatry誌に掲載された（Shimabukuro et al., June 3, 2024）。

4.被虐待経験が母親の共感力や育児に与える影響と世代間伝達の研究
子ども虐待の世代間伝達を防ぐには、親の共感力が重要である。本研究では、虐待歴のある母親13人と対照群42人を比較し、パス解析を用いて、逆境経験が虐待へとつながる経路や、感情・認知共感、抑うつ、育児スタイルの関連を検討した。その結果、虐待経験が感情共感を高め、抑うつを介して育児に影響を及ぼすことが明らかになった。本研究は本学クロスファームの成果の一環として、世代間伝達の理解を深める知見を提供した。その成果はSci. Rep.誌に掲載され、国際プレスリリースを通じて海外に公表された（Kawaguchi et al., Mar 5, 2025）。

5.国際共同研究の進展と成果
中国・ハルビン医科大学の王佳教授らとの共同研究により、自閉スペクトラム症（ASD）幼児における白質経路構造と大脳皮質機能結合の異常を世界で初めて明らかにした。研究成果はNeuroImage誌に掲載され、国際プレスリリースを通じて海外に公表された（Wang et al., Feb 28, 2025）。さらに、ASDモデルマウスを用いた研究において、Piezo2の過剰発現が触覚過敏に関与することを解明し、Piezo2阻害剤およびソフトタッチ刺激により、触覚過敏、社会性障害、反復行動の改善と脳活動の正常化を確認した。研究成果はLife Sci.誌に掲載された（Zhai et al., Mar 1, 2025）。

6.被虐待児の行動・情緒問題とエピジェネティック変化・視覚注意の関連を探る研究
本研究は、幼少期の虐待（CM）がDNAメチル化年齢の加速を引き起こし、行動や感情面に悪影響を及ぼすことを検討した。被虐待児36名と定型発達児60名を比較し、DNAメチル化年齢の測定、視線追跡による対人認知評価、行動・感情評価（SDQ）を行った。その結果、CMは老化の加速と顔の目の領域への注視時間の減少を引き起こし、行動面および情緒面の問題と関連していた。本研究は、CMによる早期老化や社会的認知機能の変化が子どもの発達に与える影響を明らかにし、早期介入の重要性

を示している。本研究の成果は国際誌に投稿中。

7.新書で、親の行動が子どもの脳に及ぼす影響を科学的に解説
「マルトリ予防®」および「とも育て®」の普及に注力し、その最新の研究成果を集大成した著書（友田明美、ＳＢ新書「最新脳研究でわかった 子どもの脳を傷つける親がやっていること」）を発刊した（2025年12月7日）。本書では、養育者による避けたい子育てについて、科学的エビデンスを基に具体的な事例を用いて解説しています。さらに、不適切な関わりが引き起こす神経生物学的な変化や、その予防方法についても詳しく言及している。この内容は共同通信PRワイヤーによるプレスリリースを通じて広く一般にも発信された。

8.子ども虐待が脳とアタッチメント（愛着）に及ぼす影響 ～国際的な啓発と社会への貢献～
海外11カ国のJICAスタッフや子ども保護関係者向けに、「子ども虐待のない社会をつくる：とも育て®」をテーマに講演を実施し、研究成果を発信した（Tomoda, Feb 21, 2025）。講演では子どもの権利の重要性を強調し、各国の保護政策推進を支援。また、こども家庭庁の委託で敦賀市にて子育て支援研修を実施し、宇都宮市の虐待防止推進全国フォーラムにも登壇。専門職向け研修が現場対応力の向上に貢献すると期待される。さらに、「マルトリ予防®研究」の成果を全国の里親6,000人や民生委員1,518人に発信し、全国里親会のHPで公開。マルトリ予防®啓発サイトのアクセス数は7.5万件を超え、共同子育てへの関心の高まりが示された。

9.敦賀市での多職種アプローチによる社会実装プロジェクト：未来に向けた子育て支援とマルトリ予防®の連携
従来の支援機関では、マルトリ（子どもへの避けたいかかわり）のリスク評価に、自己記入式アンケートや面談が主に用いられてきた。しかし、これらの方法では見落としの可能性があった。そこで、養育ストレスを早期に評価し、マルトリ予防®に役立てるため、ポジティブな表情認識能力を測定する「スマイル認知アプリ」を開発し、現在特許を出願中である。さらに、研究成果をもとに、多様な対象者向けのセミナーや研修を実施し、社会実装と啓発活動を進めた。これにより、社会全体での虐待防止と子育て支援の環境整備を推進し、虐待予防の実現を目指した。また、敦賀市健康推進課と連携し、スマイル認知アプリの実証実験を行った。

10.子どもの行動チェックリストを用いた児童虐待の評価
児童虐待（CM）は深刻な影響を及ぼすが、発生直後の包括的研究は少ない。本研究では、子どもの行動チェックリスト（CBCL）を用い、被虐待児32名と定型発達児29名の行動・感情面を評価した。CM群は多くの項目で高スコアを示し、ROC解析では合成スコアのAUCが0.902だった。特に5～7歳での虐待は「身体的訴え」と関連し、影響は虐待の種類によって異なった。包括的支援の必要性が示され、本研究の成果は国際誌に投稿中。

特色等
【発達支援研究部門】
「マルトリ予防®」と「とも育て®」の普及を目指し、科学的エビデンスの構築を進めている。研究では、虐待ストレスが子どもの脳や心に及ぼす影響を明らかにし、その成果をもとに、養育ストレスを早期に捉え、防ぐためのツールとして、ポジティブ表情の認識力を評価する「スマイル認知アプリ」を開発した。さらに、これらの知見を社会実装へとつなげるべく、研究成果に基づくセミナーや研修を各地で実施し、多様な支援者層への啓発を図った。虐待防止と子育て支援を社会全体で推進する環境整備にも取り組み、その一環として、敦賀市において「スマイルアプリ」を活用した実装実験を展開した。

本学の理念との関係
【発達支援研究部門】
ＭＲＩ等の生体画像技術を基盤とする画像解析法、生体機能解析法等の開発、及びそれらを用いた生命現象の解明並びに臨床医学への応用に関する世界的に優れた研究を行い、本学の理念の具現化にあたる。

3.研究実績

区分		編数		インパクトファクター（うち原著のみ）	
		2018～2023年分	2024年分	2018～2023年分	2024年分
和文原著論文		0	0	—	—
英文論文	ﾌｧｰｽﾄｵｰｻｰ	0	2	0(0)	8.5(8.5)
	ｺﾚｽﾎﾟﾝﾃﾞｨﾝｸﾞｵｰｻｰ	0	3	0(0)	12.3(12.3)
	その他	0	3	0(0)	18.2(18.2)
	合計	0	6	0(0)	30.5(30.5)

(A) 著書・論文等
(1) 英文：著書等
a. 著書

b. 著書（分担執筆）

c. 編纂・編集・監修

(2) 英文：論文等
a. 原著論文（審査有）

2498001 Kawaguchi Y, Kurata S, Kawata NYS, Yao A, Nishitani S, Fujisawa TX*, Tomoda A*.: Effects of childhood maltreatment on mothers' empathy and parenting styles in intergenerational transmission., Sci. Rep., 15(1), 7787, 20250305, DOI: 10.1038/s41598-025-92804-0, #3.8

2498002 Zhai J, Hao H, Xu Z, Tomoda A, Zhang X, Wang X, Liu Y, Cao X, Li D, Zhang Y, Li D, Zhang Y, Yao X, Fan L*, Wang J*.: The effect of Modulation Piezo2 by IGF-1 on tactile hypersensitivity in BTBR model mice., Life Sci., 364, 123449, 20250301, DOI: 10.1016/j.lfs.2025.123449., #5.2

2498003 Shimabukuro S, Oshio T, Endo T, Harada S, Yamashita Y, Tomoda A, Guo B, Goto Y, Ishii A, Izumi M, Nakahara Y, Yamamoto K, Daley D, Tripp G.: A pragmatic randomised controlled trial of the effectiveness and cost effectiveness of Well Parent Japan (WPJ) in routine care in Japan: The TRaining And Nurturing Support FOR Mothers (TRANSFORM) study., J. Child Psychol. Psychiatry, 65(12), 1624-1637, 202412, DOI: 10.1111/jcpp.14007., #6.5

2498004 Shimabukuro S, Oshio T, Endo T, Harada S, Yamashita Y, Tomoda A, Guo B, Goto Y, Ishii A, Izumi M, Nakahara Y, Yamamoto K, Daley D, Tripp G.: A pragmatic randomized controlled trial of the effectiveness and cost effectiveness of Well Parent Japan (WPJ) in routine care in Japan: The TRaining And Nurturing Support FOR Mothers (TRANSFORM) study., J. Child Psychol. Psychiatry, 65(12), 1624-1637, 202412, DOI: 10.1111/jcpp.14007., #6.5

2498005 Yao A, Nishitani S*, Yamada Y, Oshima H, Sugihara Y, Makita K, Takiguchi S, Kawata N.Y.S, Fujisawa TX, Okazawa H, Inatani M, Tomoda A*.: Subclinical structural atypicality of retinal thickness and its association with gray matter volume in the visual cortex of maltreated children., Sci. Rep., 14(1), 11465, 20240520, DOI: 10.1038/s41598-024-62392-6., #3.8

2498006 Kawata NYS,Nishitani S, Yao A, Takiguchi S, Mizuno Y, Mizushima S, Makita K, Hamamura S, Saito DN, Okazawa H, Fujisawa TX, Tomoda A: Brain structures and functional connectivity in neglected children with no other types of maltreatment., Neuroimage, 292, 120589, 20240415, DOI: 10.1016/j.neuroimage.2024.120589, #4.7

b. 原著論文（審査無）

c. 原著論文（総説）

d. その他研究等実績（報告書を含む）

e. 国際会議論文

(3) 和文：著書等
a. 著書

2498007 友田明美: SB新書： 最新脳研究でわかった 子どもの脳を傷つける親がやっていること, SBクリエイティブ社, 20241207, DOI: 978-4815625757

b. 著書（分担執筆）

2498008 友田明美：子どもへの虐待：身体的虐待・性的虐待：福井次矢、高木誠、小室一成：今日の治療指針2025年版，医学書院，1493-1494，20250101，978-4-260-05717-2

c. 編纂・編集・監修

2498009 友田明美：トラウマと依存症 脳に何が起きている？，アスク・ヒューマン・ケア，20240920，DOI：978-4-909116-52-9

(4) 和文：論文等

a. 原著論文（審査有）

b. 原著論文（審査無）

c. 総説

2498010 伊達岡五月，山本知加，松村菜々子，Kawata NYS，牧野拓也，清水康弘，友田明美：子どもと養育者に対するオンライン心理支援，子どものこころと脳の発達，15(1)，3-10，20241202，DOI：https://doi.org/10.34572/jcbd.15.1_3

d. その他研究等実績（報告書を含む）

2498011 友田明美：孤立・孤独が引き起こす親から子へのマルトリートメント（不適切な養育），BRAIN and NERVE，70(2)，161-166，202501，DOI：https://doi.org/10.34572/jcbd.15.1_3

2498012 友田明美：アタッチメントを知ろう　親を褒めて子どもを育む　マルトリートメント(不適切な養育)の予防，とも育てのすすめ，保育と保健，30(2)，75-78，202409

e. 国際会議論文

(B) 学会発表等

(1) 国際学会

a. 招待・特別講演等

2498013 Tomoda A.：The Impact of Childhood Maltreatment on Children's Lives.，JICA Seminar on Protecting Vulnerable Children: Focusing on CBI & Supporting Policies，Upolu Island，Samoa，20240823

2498014 Tomoda A，Fujisawa TX：The Neurobiological Effects of Childhood Maltreatment on Brain Structure，Function，and Attachment.，17th International Neuroscience and Biological Psychiatry Regional Conference Asia（第17回国際ストレス行動学会），山口市，20240915

2498015 Tomoda A.：The Impact of Childhood Maltreatment on Children's Lives.，JICA Seminar on Protecting Vulnerable Children: Focusing on CBI & Supporting Policies，福井県永平寺町，20241004

2498016 Tomoda A.：Creating a Society Free from Child Maltreatment: Uniting Adults to Raise Children Together.，Follow-up Online Seminar on KCCP program "Protecting Vulnerable Children"，Web配信，20250219

b. シンポジスト・パネリスト等

2498017 Tomoda A.：Trauma and Neurodevelopmental Effects in Children: Insights into Trauma and Attachment.，CRNACDD International symposium，Kuala Lumpur，Malaysia，20250221

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(2) 国内学会（全国レベル）

a. 招待・特別講演等

2498018 友田明美：親を褒めて子どもを育む―マルトリートメント（不適切な養育)の予防―，第66回日本小児神経学会学術集会，ランチョンセミナー7，東京，20240530

b. シンポジスト・パネリスト等

2498019 友田明美：家族支援～発達障がい・マルトリートメントの神経生物学的観点から～，第30回日本保育保健学会，シンポジウム1『アタッチメントを知ろう』，東京，20240525

2498020 友田明美：子どもの脳を傷つけない子育て ～マルトリートメントによる脳への影響と回復アプローチ～，令和6年度 東海・北陸ブロック里親連絡協議会ふくい研修大会，あわら市，20241012

2498021 友田明美：「「医療」×「福祉」社会で子どもを育むとは～「マルトリ予防」と「とも育て」～」，令和6年度 東海・北陸ブロック里親連絡協議会ふくい研修大会，あわら市，20241012

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

2498022 藤澤隆史、友田明美：親を褒めて子どもを育む―マルトリートメント（不適切な養育)の予防―，日本心理学会第88回大会，熊本市，20240908

2498023 倉田佐和：養育不調母親の脳白質構造の特徴と小児期虐待の世代間連鎖との関連性，第15回日本子ども虐待医学会学術集会，前橋市，20240831

e. 一般講演

f. その他

(3) 国内学会（地方レベル）

a. 招待・特別講演等

2498024 友田明美：家族支援～発達障がい・マルトリートメントの神経生物学的観点から～，第22回日本小児心身医学会東海北陸地方会，福井県永平寺町，20250309

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(4) その他の研究会・集会

a. 招待・特別講演等

b. シンポジスト・パネリスト等

c. 一般講演（口演）

d. 一般講演（ポスター）

e. 一般講演

f. その他

(C) 特許等

区分	内容（発明の名称）	発明者又は考案者

(D) その他業績

4.グラント取得

(A) 科研費・研究助成金等

区分	プロジェクト名	研究課題名	代表者名	分担者名	研究期間	金額（配分額）

区分	研究種目	課題名	代表者名	分担者名	研究期間	金額（配分額）
文部科学省科学研究費補助金	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）	Relationship between auditory measure and social scale, structural brain, and functional connectivity in children with PVA experience	Ｎａｔａｓｈａ　Ｋａｗａｔａ		20230401-20260331	¥0
文部科学省科学研究費補助金	若手研究	A brain imaging study to investigate the neural correlates of brain structural and functional connectivity in relation auditory abilities in	Ｎａｔａｓｈａ　Ｋａｗａｔａ		20220401-20250331	¥0
文部科学省科学研究費補助金	基盤研究(B)	エピゲノム情報と脳画像に基づいた子どもの養育歴と社会認知発達の推定モデリング	藤澤　隆史	友田 明美,西谷 正太,水野賀史	20240401-20270331	¥6,110,000
文部科学省科学研究費補助金	基盤研究(C)	アプリを活用した養育者のマルトリートメント予防セルフモニタリングシステム構築	伊達岡　五月（和田五月）	Natasha Kawata,友田明美	20230401-20260331	¥1,690,000
文部科学省科学研究費補助金	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）	Relationship between auditory measure and social scale, structural brain, and functional connectivity in children with PVA experience	Ｎａｔａｓｈａ　Ｋａｗａｔａ		20230401-20260331	¥0
文部科学省科学研究費補助金	若手研究	A brain imaging study to investigate the neural correlates of brain structural and functional connectivity in relation auditory abilities in	Ｎａｔａｓｈａ　Ｋａｗａｔａ		20220401-20250331	¥0
文部科学省科学研究費補助金	若手研究	保育士の実行機能から考える保育士配置基準の検討	矢尾　明子		20230401-20260331	¥780,000
文部科学省科学研究費補助金	基盤研究(B)	エピゲノム情報と脳画像に基づいた子どもの養育歴と社会認知発達の推定モデリング	藤澤　隆史	友田 明美,西谷 正太,水野賀史	20240401-20270331	¥6,110,000

区分	機関名	課題名	研究者名	研究期間	契約金額

区分	機関名	課題名	研究者名	研究期間	契約金額

(B) 奨学寄附金

受入件数	0
受入金額	¥0

5.その他の研究関連活動

(A) 学会開催等

区分	主催・共催の別	学会名	開催日	開催地

(B)　学会の実績

学会の名称	役職	氏名
Asian & Oceanian Child Neurology Association (AOCNA)	終身会員 (Life Member)	友田　明美
International Brain Mapping & Intraoperative Surgical- Planning Society	Program committee board	友田　明美
日本小児精神神経学会	認定医	友田　明美
日本子ども虐待医学会	理事	友田　明美
北米神経科学会	一般会員	友田　明美
日本ADHD学会	一般会員	友田　明美
日本子ども虐待防止学会	一般会員	友田　明美
米国児童青年精神医学会	一般会員	友田　明美
日本小児神経学会	評議員	友田　明美
日本発達神経科学会	理事	友田　明美
日本児童青年精神医学会	一般会員	藤澤　隆史
日本臨床発達心理士会	一般会員	藤澤　隆史
日本神経科学学会	一般会員	藤澤　隆史
日本心理学会	一般会員	藤澤　隆史
日本社会心理学会	一般会員	藤澤　隆史
日本発達心理学会	一般会員	藤澤　隆史
日本発達心理学会	一般会員	平岡　大樹
日本赤ちゃん学会	一般会員	平岡　大樹
日本教育心理学会	一般会員	平岡　大樹
日本心理学会	一般会員	平岡　大樹
日本社会心理学会	一般会員	平岡　大樹
Society for Research in Child Development	一般会員	平岡　大樹
日本小児科医会	一般会員	倉田　佐和
日本児童青年精神医学会	一般会員	倉田　佐和
日本子ども虐待医学会	一般会員	倉田　佐和
日本小児神経学会	一般会員	倉田　佐和
日本小児科学会	一般会員	倉田　佐和

(C)　座長

国内学会 （全国レベル）	学会名	氏名

(D)　学術雑誌等の編集

学術雑誌等の名称	査読・編集	委員長（主査）・委員の別	氏名	査読編数
BMC Psychiatry	編集	委員	友田　明美	
NeuroImage	査読	委員	藤澤　隆史	1
Progress in Neuro-Psychopharmacology and Biological Psychiatry	査読	委員	藤澤　隆史	1
Frontiers in Psychiatry	編集	委員	藤澤　隆史	
BMC Psychiatry	編集	委員	友田　明美	
Frontiers in Child and Adolescent Psychiatry	査読	委員	倉田　佐和	1
NeuroImage	査読	委員	藤澤　隆史	1
Progress in Neuro-Psychopharmacology and Biological Psychiatry	査読	委員	藤澤　隆史	1
Frontiers in Psychiatry	編集	委員	藤澤　隆史	

(E)　その他

6.産業・社会への貢献

(A)　国・地域等への貢献

(1) 審議会・委員会・公益法人・会社等への参加状況

区分	機関の名称等	委員会の名称等・役割	氏名	期間

(2) 社会人等への貢献及び学校等との連携・協力による活動

区分	活動名・活動内容	主催者・対象者等	氏名

(B) 国際貢献

国際協力事業

活動名・活動内容	氏名	相手方機関名	役割	期間	活動国名

(C) その他業績

(D) 特記事項